

思いついたストーリーのネタをつらつら書き綴ってみる

4年M科 ファン

1. まずはじめに

私こと、ファンは毎年この年に作っているゲームの説明なりを会誌のネタにしているわけだが、残念なことに今年は何も作っていないのだ。なんてこったい。

とはいえ何も書かない訳にもいかない。ひとまず何かネタが無いかと思ひ浮かべたところ、ひとまず暖めていたストーリーがあったのでそれについてグダグダと書き綴ってみることにする。正直思ひ浮かんだばかりなので、何もまとまっていないのである。つまり、この文章は基本グダグダであり、整合性がないのははや目に見えるわけだ。

ということで、その辺りの突っ込み話にひたすら私の空想ネタを面白半分読んでもらいたいと思う。

2. 物語の世界観

物語の世界観は中世ファンタジーである。世界があり、大陸があり、そこにはそれぞれの土地を治める王国がある。王国には髭を生やした王様がいたり、偉そうな女王様がいたりする。また国には甲冑を着込み、槍を持つ兵士たちがいる。また火の玉を飛ばすなどの魔法を使える者も中にはいる。

またこの世界には魔物と呼ばれるものがある。中には人間と共存をしていたり、知恵を持ち友好的なものもいるが、ほとんどが知恵が無く凶暴であったり、知恵があっても人間や家畜を襲い掛かる者ばかりである。また、魔物を統治する「魔王」がいる。魔王はここ数年で突如として出てきた存在であり、世界を暴力で征服せんとする悪い奴である。

3. 物語の主人公

主人公は誰か。伝説の勇者か、それとも王国の王子か。ここはあえて、辺境の村に住む名も無き村娘に主人公とってもらうことにする。彼女は5人姉妹の長女であり、そばかすが少し気になるごくごく普通の世界中の何処にでもいるような少女である。他の者と違うところといえば、彼女の住む村ははるか昔に退治されたという魔王(現在の魔王とは違う魔王)が住んでいた場所だという途方の無い伝説がある事と、畑仕事を手伝っているせいか若干彼女は力自慢であるということくらいである。

村は至って平和である。魔物よりも凶暴な肉食の動物のほうが脅威だったし、戦争に巻き込まれるには少々田舎過ぎた。来ると言えば、魔王が封印されているという噂を聞きつけた酔狂な考古学者か旅商人くらいである。そんな村に住む彼女は、いわば来た人に「ここは〇〇村だよ」と言うくらいの村人Aに過ぎない存在なのだ。

4. 物語の始まり

さて、このままだと物語が始まらない。何処かで彼女は運命という理不尽な流れに巻き込まれてもらわなければならないのだ。

平和な村に、魔王が封印されている事を聞きつけた現魔王が魔物に調査を命じる。人間と対立している魔物たちは、ひとまず村の人間たちを殺戮してから調査しようとする。村も何とか応戦する。

少女はこのとき、村の寺院に一人参拝に向かう途中だったが、運悪くここで魔物に囲まれてしまう。少女はなす術なく殺されてしまうと思いきや、ひとまず寺院まで逃げ切って難を逃れることができた。ここで彼女はまた魔物たちに見つかってしまうが、偶然隠し扉に入り込み(というよりも倒れるように入ってしまう)難を逃れる。

本来ならばその扉は封印されていたはずなのだが、彼女自身もそんなことを考えている暇は無い。奥へと進むと、そこには黒い刀身の剣と真っ黒な全身鎧が飾られていた。これが、かつて封印されたという魔王の名残だった。

彼女はその魔王と同化してしまい、ひとまず魔物たちを撃退するも左腕には宝石のような核が埋め込まれてしまう。

村人からも何となく避けられてしまい、彼女は魔王の呪いを解くために、そして平穏な生活を取り戻すために村を出ざるをえなかったのだった。

5.物語の進行

かくして少女は旅立たざるをえなくなったわけだが、彼女の大きな目的は「魔王の呪いを解く」事である。しかし、彼女のその目的は決して叶う事は無い。手段は見つからず、むしろ物語を進行するにつれて、彼女は魔王との共存を考え始めてしまう。一種の開き直りである。一度は彼女も魔王の呪いから解放される(というよりも寧ろ他の人間に移ってしまう)ということがあるが、その力を使って悪さをしようとする人間から魔王の力を、彼女は彼女自身の意思で取り戻す。そして彼女の目的は「魔王の呪いを解く」から「平穏な生活を取り戻す」に変わり、その手段として「今の魔王を討伐する」ことにするのだ。

また旅の行く先で色々な人にも出会う。魔王を研究する危ない考古学者。女王なのに盗賊をやっている少女。高飛車で派手な格好をしているのに正体は貧乏で主人公と同じ多くの姉妹を持つ魔導士。力だけが自慢の騎士。魔王の力を失った時、剣を教えてくれる老人。そして、魔王を討伐しようとするいわば勇者など。彼らとの出会いを経て、成長していく。そんな、ちょっとだけ癖のある王道なストーリーなのである。

6.最後に

自分で書いておいて全くまとまっていなかった。頭の中では一応一通りのストーリーができてはいるはずなのだが、それをまとめる力が無いのは悔しいところである。

いつかこのストーリーをオリジナル作品として文章、もしくはRPGとして送り出したいところだ。時間と機会があればの話だが。

ところで、主人公である村娘のモチーフがあるのだが、気づいていただけたでしょうか？ 実はこの娘のモチーフは「イース・オリジン」の戦うヒロイン、ユニカ・トバである。そして、黒い鎧は「ドラゴンフォース」のデュランなのだ。前者は見た目は普通の少女なのに怪力自慢である。後者は黒い全身鎧を纏って自分が女であることを隠し、一国の主を担っている女傑である。私は昔からこういうキャラクターが好きで、女性のパワーファイターキャラとかはよく使っているものだった。最近のストライクだと「イース7」のクルシェだ。彼女はなんと自分の体以上のハンマーを振り回すことができるほどの怪力である(一応特殊な力を借りて、という設定が…多分あると思う。きっとある)。こういうキャラはもっと増えて良いと思っている。

私はキャラクターを考える時は、いつも何かの既存のものから借りて、まずそのキャラクターで物語を作ってみる。そしてそのキャラクターの足りない部分と足りすぎている部分をそれぞれ加えたり削ってみたりするのだ。そうすると全く新しいキャラクターができたりする。もちろん面影とかは残ってしまうのだが、そこはあえて私の癖というか特徴と言っておきたい。勿論、やりすぎるとパクリになってしまったりするので、ここは注意したいところである。

こうやって物語を作ってみると案外楽しいものである。勿論、いわゆる恥ずかしい歴史である黒歴史になってしまったり、今この場でもこの文章を書く事が恥ずかしかったりするのだが、そこはまあこんなのもあったなあくらいに思っただけ良いのではないだろうか？

ひとまず、今回こういう形で自分の考えた物語を発表できたことを私は光栄に思うし、そして何より心の中でもやっとしたものが取れたと感じているのだから。